

私が市の図書館を初めて利用したのは、三歳になる息子と夫の三人で同市に引越して間もなくのことでした。昼間は息子と二人きりの時間が多く、外とのつながりを求めていた母子にとって、図書館は公園と並んで大切な場所となりました。

当時保谷市の図書館で手にした登録カードは、『どろんこハリー』の図柄で、大のお気に入り。いつでも財布に入れておき、毎週の図書館通いが始まりました。そのハリーのカードは、田無市と合併後、今のカードに変更になりましたが、今でも息子の分と二枚大切にとつてあります。

どろんこハリーの

図書カードと、居心地のよいじゅうたん敷きの児童書コーナーと並んで、私たち親子のお気に入り。毎月一回開催されるおはなしひろばでした。そこでは、素ばなしと手あそび、そして絵本の読みきかせをしてくれます。子どもたちがかたまつて座り、小さな空間に一本のろうそく(これは「おはなしのろうそく」という名がついていまし

わたしと図書館



—非日常への扉— 伊尻 由起

たがともされ、わたしたち親子は不思議な世界へ連れていってもらえるのです。おはなしの世界の始まりです。と魔法をかけられ、主人公と一緒に空を飛んだり、洞窟の中に閉じこめられたり、時には鬼やおおかみをやつつけて帰って来ることができるのです。そして、おはなし会のラストにこのろうそくを消すのはその月に誕生日を迎える子ども。

息子はどれほど十月を待ったことでしょうか。毎月一回のこのおはなしひろばは、何よりの楽しみでした。それこそ槍は降りませんでしたが、大雨の日も雪の日も、「どうする?」という私の問いに息子は当たり前でしよという顔をして「行く!」と言ったものです。

図書館で出会った数々の本やおはなしは、きつと心の中に残っていることでしょう。そして、日常的な空間でありながらも非日常を体験できる本やおはなしに数多く触れることのできる図書館は、わたしたちの生活にはなくてはならないものだと思います。

児童サービス特集にちなんで、「子どもの本」をテーマに、利用者の方から原稿をお寄せいただきました。

子どもの本の棚には掘り出し物がいっぱい

内田 信子

子どもの本に分類されている本をよく借りるので、司書さんに「原稿を書いてみませんか」と言われました。それで、お勧めの本や作家を紹介させてもらうことにしました。

私は小学校の高学年の時に『ナルニア国物語』に出会ってからというもの、ファンタジーが大好きになりました。それ以来大人になっても、子どもの棚も大人の棚も関係なく読み続けています。そして、ファンタジーは、子どもの本に分類されていることが多いのです。

『ハリー・ポッター』のヒット以来、ファンタジーの翻訳が相次ぎ、面白い本が本場に多くて、嬉しいかぎりです。『ハウルの動く城』で有名になったダイアナ・ウィン・ジョーンズは、大人向けにも子ども向けにもたくさん書いていて傑作が多い作家です。ヤングアダルト向けに書いているマーガレット・マシーは、ニユージーランドの作家ですが、ティーンエイジャーの心理描写が見事で、鳥肌が立つてしまうほどスリリングな物語が最高です。『マリーリン』『セブンスター』『ストラヴァガンザ』『ネシヤン・

サーガ』等、本当に読みごたえのある本が、子どもの棚にそろっています。是非手にとつてみてください。

子どもの本をよく読むのは、他に理由があります。私は子どもたちに小学校卒業まで読み聞かせをしていました。その時に読んで以来、ファンになり読み続けている作家があります。岡田淳、上橋菜穂子、高樓方子、梨木香歩、荻原規子等素晴らしい作家の本があり、新しい本が出るのが楽しみです。

今、娘が中学2年になり、お互いに本を推薦し合ったり感想を言い合ったり、私の読書の楽しみは更に広がっています。

子どもの本には、社会や身の回りで困難にぶつかった人が、問題に向き合う姿があり、本当に励まされます。ところで、思春期の子どもを育てる上でとても参考になる本があるのを推薦します。アン・ファイン作『妖怪バンシーの本』。良いですよ。



「子ども読書年」をかわきりに、子どもの読書に対する社会的な関心は、年々高まりを見せていますが、忘れてならないのは、子どもが自由な読書ができることです。そこにこそ、公共図書館の役割があります。図書館にはいつでも面白い本があると思ってもらえる環境づくりに、努めたいと考えています。